

夢野久作全集



三一書房

夢野久作全集 2 一九六九年七月三十一日 第一版第一刷発行

一九七三年十月十五日 第二版第二刷発行

編者 中島河太郎・谷川健一 ©杉山龍丸 一九六九年

発行者 竹村 一 発行所 株式会社三一書房 東京都千代田区神田駿河台二の九

郵便番号一〇一 電話東京(二九一)三二三一―五番 振替東京八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社 製本所 株式会社鈴木製本所

目次

ココナツトの実	7
斜坑	23
怪夢	41
焦点を合わせる	53
狂人は笑う	70
幽霊と推進機	82
ビルジング	93
キチガイ地獄	95
老巡查	116
けむりを吐かぬ煙突	124
縊死体	137
暗黒公使	139

解題（中島河太郎）

341

解説対談（渡辺啓助・谷川健二）

345

夢野久作全集2

ココナツの実

妾は今、神戸海岸通りのレストラン・エイシャの隅っこに、ちよこりと腰をかけている。油気のない前髪をういういしく垂らして、紫ミラネーゼの派手な振袖を着て、金ピカの塩瀬を色気よく高々と背負っているのだから、ウツカリした男の眼には十四、五ぐらいにしか、うつらないでしようよ。どうぞ、そのおつもりでネ……ホホホホ……。

妾の手にはタッタ今ボーイさんが買つて来てくれた号外が一枚載っている。これは今から三時間ばかり前に、ここから二、三町先の海岸通りの横町で起った事件で、あちこちのテーブルに固まっている男のお客たちも首をつき合わせながら引っぱり合っている。西洋人までが鹿爪らしく耳を傾けているせいか、室の中が急にシンカンとなつて……この号外をここに挟んでおくわ……ごらんの通りトモ大変な活字だらけなの……。

——財界のムッソリニ、高利貸王、赤岩権六氏粉碎さる

——本日午後五時頃、同氏経営の通称ゴンロク・アパート

ト前、海岸通横町街路上で——××党の爆弾か？ 路面のアスファルトに二個の大穴——

——スバライ爆発の威力 同氏の遺骸と名刺、同氏乗用の自動車の破片八方に散乱し、当該自動車の運転手とアパート勝手口付近事務室に残留せる女事務員二名惨死し、路上の男女数名即死重軽傷——十数間を隔てた十字路を整理中の交通巡査も打倒されて人事不省——電柱その他付近の店頭メチャメチャ——

——〔続報〕——事件後約一時間を経て出勤した同アパートの宿直小使白木某は、五階に居住していた美少女エラ子（本名年齢等一切不明）のコック兼従僕にして身長七尺に近い印度人ハラムと称する巨漢が、同少女の寢室床上に一糸も纏わざる裸形のまま、射殺されているのを発見——次いで同少女エラ子が情夫の××黨員らしき青年と共に行方を晦ましているらしい事が判明した——

——美少女エラ子は赤岩氏が一カ月ばかり前に何処からか連れて来て匿ましている同氏の私生児で、今日まで固く口止されていた事実を小使の白木某が陳述した——

——同アパートは新築勿々のため、一階の事務室と、エ

ラ子の居室のほか全部がガラ空きであった。——且、爆発現状の目撃者が重傷、惨死、又は人事不省に陥っているため、目下のところ事件の真相について、何等の手がかりを得ず——

——警察当局は曰く——××党とは絶対に無関係だ。赤岩氏が同アパートの空室に秘密運搬中の、鉱山用の火薬類が、取扱いの不注意のために発火したものと、少女エラ子に絡まる情痴関係の殺人が、偶然に一致したものではないか——爆弾ならば一発で効果は充分の筈である。路面に残っている二個の大穴が何と言っても疑問の中心でなければならぬ——なお目下詳細に亘って取調中云々——

——疑問の美少女エラ子の行方は——正体は？——

妾はフキ出してしまった。あんまりトンチンカンな記事なので、一人でゲラゲラ笑い出したら、カフェーじゅうの西洋人や日本人が一時にこつちをふり向いた。帳場の男も註文を通しながら妾の横顔に、色眼みたいなのを使っている。だけど妾がこの事件のホントーの犯人で、疑問の少女エラ子だなんて事は一人も気づいていないらしい。何と言ったって妾のメーキャップは、やっとな女学校に入ったぐらいのオチャッパイにしか見えないのだから……。

そんな連中のボカーンとした顔を見まわしているうちに、妾はたまらなくユカイになってしまった。スコシ酔っているせいかも知れないけど……妾はわざと黄色い声を出し

て、帳場の男に頼んでやった。

「……あのね。すみませんけど、レターペーパーと鉛筆を貸してちょうだいナ……」

帳場の男が眼をパチクリさせた。兵隊みたいに固くなつて、

「かしこまり……ました」

と言いいいすぐにペーパーと万年筆を持って来てくれた。妾は一気にペンを走らせはじめた。シン台のカクテルをチビリチビリ飲みながら……。

……みんな面喰っているらしい。そんなことなんか、どうでもいいんだけど……。

あたしは事件の真相を発表する前にタッタ一こと書いておく光栄を有します。

妾がこの手紙を書き上げるまでには、まだどれぐらい時間がかかるかわからないけど、その間にこのあたし……疑問の少女エラ子を見つける事が出来なければ、日本の警察も新聞記者も、みんなお馬鹿さんよ……って……ね……。

大丈夫よ。誰も妾を捕まえに来やしないわよ。妾がここを出たあとでこの置手紙を見て騒ぎ出すぐらいがセキのヤマよ。

妾は本当の事を書いて置きます。妾はつくづく神戸がイヤになってしまいました。シンカラお友達になってみたいと思う人が一人もない事がわかりました。ですからモウこれつきり神戸に来まいと思って、タッタ一人でこのカフェ

エーに乾盃をしに來たら、ちょうどコナナ号外が出たので、ツイ持ち前のイタズラ氣を出してしまったのです。

妾は今朝早く窓際のベッドの中で眼を醒ました。前の晩に遅くまで遊んだ朝は、いつでも、おひる頃まで睡たいのに、今朝はよっぽどどうかしていた。

妾は窓のカアテンを引いた。硝子が一面にスチームで露っぽくなっていたから、手の平で拭いた。冷たかったので頭がハッキリとなった。

妾の室はゴソロク・アパートの五階だった。窓の外は神戸の海岸通りの横町になっていた。左手に胡粉絵みたいな諏訪山の公園が浮き出している。右手の港につながっている船の姿がまるで影絵のよう。その向うから冷たい太陽がのぼって、霜の真白な町々を桃色に照している。窓硝子が厚いから何の音もきこえない。

そんなシンカンとした景色を見ているうちに、妾はヘンに淋しくなってきた。何故かと言う事はないけれど……こんな事は今までに一度もなかった。

妾は古代更紗さらのカアテンを引いて、つめたい外の景色を隠した。思い切つて寝返りをしてみた。

妾の寝台は隅から隅まで印度風で凝り固まっていた。白いの天井裏のパンカアと、海月色に光る切子硝子のシャンドリアだけだった。そのほかは椅子でも、机でも、床でも、壁でも、みんなアクドイ印度風の刺繡や、更紗模様で蔽いかくしてあった。その中でも隣りの室との仕切りの垂

れ幕には、特別に大きい、黄金色のさそりだの、燃え立つような甘草の花だの、真青な人喰い鳥だのがノサバリまわっていた。

その垂幕の間から、隣りの化粧部屋と、その向うの白い浴槽がホノ暗くのぞいている。浴槽の向うには鏡の屏風が立っている。そんなものの隅々にピカピカチカチカ光っている金銀だの、瀬戸物だのの裝飾が、一つ一つにブルドッグ・オヤジ……妾の旦那になっている赤岩権六の金ピカ趣味をサラケ出していた。見れば見るほど淋しい、つまんないものばかりだった。

そのブルドッグ・オヤジの赤岩権六は、ゆんべ夜中に急用が出来て、諏訪山裏の本宅の白髪婆はなのところへ帰った。だから妾は今朝、一人ぼっちで眼を醒ましたのだった。

だけど妾がコナナに淋しいのはブル・オヤジがいけないせいじゃなかった。ブル・オヤジが百人出て來たつて、妾の氣持ちを、とり直すことなんか出来やしなかった。今までだつてそうだった。今もそうに違いなかった。

妾はタッター一人でベッドの上に長くなったまま、暗いところへグングン落ち込んで行くような氣持ちになっていた。妾はいつの間にか枕元のベルを押したらしい。入口の横の垂れ幕を押し分けて、コックのハラムがノソソリと入つて來た。

ハラムは印度人の中でも図抜けた大男だった。背の高さが二米突はぐらいあつて左右の腕が日本人の股とおんなじ大

きさをしていた。それがいつもの通り、妾の大好きな黄色い上等の印度服を引っかけて、おなじ色のターバンを高々と頭に巻き上げているばかりでなく、眼のまわりが青ずんで、瞳がギョロギョロして、鼻が尖^とんがって、腮^{きん}鬚^{ひげ}や胸毛を真黒くモジャモジャと生やしているのだから、ちょうどアラビアン・ナイトに出て来る強盗の親分みたいなスバシサで、見上げただけでも気持ちさがスーッとした。この印度人は故郷にいる時分からうらないが本職で、四十二歳の今日がきょうまで、何とか言うバラモンの神様に誓って、童貞を守っているのだ……と自分で言っていた。だけど色が黒いからホントだか嘘だかよくわからなかった。

妾は毎朝ブル・オヤジが帰ったあとで、誰もいなくなるのと、この男に抱かれてユックリお湯に入れて貰うのを何よりの楽しみにしていた。それは思いうようによってはこの上もない、ステキな冒険に違いなかったから……。

けれどもハラムは妾の処に來た最初から、どこまでも従順な妾の家來になり切っていた。今朝もやっぱりいつもの通り憂鬱なまじめな顔をしながら、黒い逞ましい両腕を悠悠とまくり上げて、妾をヤンワリと抱き上げてくれた。そうして赤チャンを扱うように親切に身体を流して、新しいタオルで包んでくれた。

「今朝はたいそう、お早う御座います……お姫様」

ハラムの日本語は、本物の日本人よりもズットお上品で、立派に聞えた。シンガポール一流のホテルで日本人専門

のボーイを志願して稽古したのだと言っていたが、発音がハッキリしている上に、セロミたいな深い響きをもっていた。

「……あたし……淋しいのよ……」

妾は濡れたまんまの両腕をハラムの太い首に巻きつけた。その拍子にハラムの身体に塗りつけた香油の匂いがムウーとした。

ハラムはすこしビクビクしたらしく、眼をまん丸にして、白眼をグルグルと動かしながら、高らかに笑いだした。

「ハッハッハッハッハッ……おおかたお姫様は……お腹がお空きになったので御座いますよう」

妾はイキナリ、その毛ムクジャラの胸に飛びついて、甘ったれるように首を振って見せた。

「イイエイエ。あたしチットモひもじかない。ゆんべ遅くまで色んなものを喰べたんだもの……それよりも妾ホントウに淋しいのだよ。お前にこうして抱っこされていてもよ……綱渡りの途中で綱が切れちゃって、そのまんま宙に浮いているような気持ちよ。ドッチへ行ったらいいのか解んなくなつたような気持ちよ。教えておくれよ。ハラム、どうしたらいいんだか……」

妾はそういう言いながらハラムの頸をヤケにゆすぶった。逞しい脂切った筋肉に、爪を掘り立てるくらい、キツクゆすぶった。けれどもハラムはビクともしなかった。軽々と妾を抱えたまま長椅子の前に突立って、妾の顔をマジリマ

ジリと見詰めているきりだった。

「……ヨウ……ハラムったら。教えてよう。どうして妾こんなに淋しいんだか……。お前は妾の家来じゃないか。何でも妾の言いつけ通りの事をしてくれなくちゃダメじゃないの……。お前はいつも妾の言いつけ通りに……」

ハラムがやっと表情を動かした。妾の瞳の底の底をのぞき込むように、青黒い瞳を据えたまま……。赤い大きな舌を出して、口のまわりの鬚をペロリとなめまわした。そうしてシンミリとした、落ち着いた声を出した。

「……わかりまして御座います……。お姫様……。何もかも運命で御座います」

ハラムは、そうした気持ちの妾を又も軽々と抱き上げて、ノッソノッソと歩きながら、室の真中に在る紫檀の麻雀台の前に来た。それは牌なんか一度も並べた事のない、妾達の食卓になっていた。その前に坐っている色真綿の肘掛椅子の中に妾の身体を深々と落し込むと、その上から綴子の羽根蒲団を蔽いかぶせて、妾の首から上だけ出してくれた。ハラムのこんなシグサは、まったく、いつもにない事だった。けれども妾は別段に怪しみもしないで、される通りになっていた。今から考えると、その時の妾の恰好は、ずいぶん変テコだったろうと思うけど……。

そればかりじゃなかった。ハラムは平生のようにパンカアを引き動かして、妾の身体を乾かしてくれる事もしなかった。そんな事は忘れてしまったように、室の隅から簾椅子

子一つ、妾の前に引き寄せて来て、その上に威儀堂々とかしこまった。そうして塔のように巻き上げたターバンを傾けて、妾の瞳にピッタリと自分の瞳を合わせると、そのまま瞬き一つしなくなった。妾も仕方なしに、真綿の椅子の中で羽根蒲団に埋まったまま、おなじようにして、ハラムの顔を見上げていた。

簾椅子がハラムの大きな身体の下でギイギイと鳴った。

その時にハラムは底深い、静かな声で、ユルユルと口を開きはじめた。妾の瞳をみつめたまま……。

「……何事も運命で御座います。私は、お姫様の運命をはじめからおしまいまで存じているので御座います。あなた様の過去も、現在も、未来の事までも、残らず存じ上げているので御座います。この世の中の出来事という出来事は、何一つ残らず、運命の神様のお力によって出来た事ばかりなのでございます」

ハラムの顔つきがみるみるうちに、それこそ運命の神様のようになり、高く見えて来た。ターバンのうしろに光っている海月色のシャンデリアまでが、後光のように神秘的な光をあらわして来た。それにつれてハラムの低い声が、銀線みたいに美しい、不思議な調子を震わしはじめた。

「……その運命の神様と申しますのは、竈の神、不浄場の神、湯殿の神、三ツ角の神、四ツ辻の神、火の山の神、タコの木の子、泥海の神、または太陽の神、月の神、星の神、リンガムの神、ヨニの神々のいずれにも増して大きな、

神々の中の大神様で御座います。その運命の大神様の思召しによって、この世の中は土の限り、天の涯までも支配されているので御座います」

妾はハラムの底深い声の魅力に囚われて、動くことが出来なくなっていました。電気死刑の椅子に坐らせられて、身体がしびれてしまったようになってしまった。大きな呼吸をしても……チョイト動いても、すぐに運命の神様の御心に反いて、大変な事が起りそうな気がして来た。

そんなに固くなっている妾を真正面にして、ハラムは裁判官のように眼を据えた。なおも、おごそかな言葉をつづけた。

「……けれども……けれども……御聡明なお姫様は、今朝から、それがお解りになりかけてお出でになるので御座います。……お姫様は今朝から、眼にも見えず、心にも聞えない何ものかを探し求めてお出でになるので御座います。……で御座いますから、そのようにお淋しいのでございます」

妾は返事の代りに深いため息を一つした。そうして今一度シッカリと眼を閉じて見せた。ハラムのお説教の意味がすぎとおるくらいハッキリと妾にわかったから……。

ハラムは毛ムクジャラの両手を胸に押し当てて、黄色いターバンを心持ち前に傾けていた。その青黒い瞳をジイと伏せたまま、洞穴の奥から出るような謙遜した声を響かした。

「……おそれながら私は、今日という今日までの間、運命の神様のお仕事が、お姫様の御身の上に成就致しますのを、来る日も来る日もお待ち申しておったので御座います。それを楽しみに明け暮れお側にお付き添い申し上げておったので御座います。眼に見えぬ運命の神様のお力を借りまして、あの赤岩権六様を、あなた様にお近づけ申し上げましたのも、かく申す、私なので御座います。それから、あの共産党の中川さまを、お伽におすすめ致しましたのも、ほかならぬ私めが仕事で御座います。そうして、かように申します私が、赤岩様のお眼鏡に叶いまして、あなた様の御守役として、御奉公が叶いますように取り計らいましたのも、皆、この私めが、私の靈魂を支配しておられます神様の御命令によって致しました事なので御座います」

ハラムはここまで言いさすと、何故だかわからないけれども、ブツリと言葉を切ってしまった。突伏したまま黙りこくって、身動き一つしなくなった。それにつれて、その下の籐椅子の鳴る音が、微かにギイギイときこえて来た。運命の神様の声のように、おごそかに……ひめやかに……。妾は今までに泣いた事などは一度もなかった。人間が何人殺されたって、どんなに大勢からイジメられたって、悲しいなんか思ったことはコレっぽかしもなかった。それなのにこの時はっかりは、何故ともわからないまんに、涙が出て来て仕様がなかった。ハラムのお説教とは何の関係

もなしに胸が一パイになって来て仕様がなかった。何が悲しいのかチットモ解らないのに、泣けて泣けてたまらなかつた。

……すると、そのうちに何だか胸がスウ——として来たようなので、妾は羽根蒲団からヒョイと顔を出してみた。

両方の目をこすって見るとハラムはまだ妾の前に頭を下げてゐる。妾を拜むように両手を握り合せて、両股を広広と踏みはだけている。そうして心の中で御祈禱か何かしているらしく、唇をムチュムチと動かしている。

そうしたハラムの姿を見ているうちに、妾はフツと可笑しくなつて来た。何だか生まれかわつたように、気が軽くなつて、思わずゲラゲラと笑い出してしまった。

ハラムはビックリしたらしかった。白眼をクルクルとまわしながら顔を上げて、妾の顔をのぞき込んだから、妾はもう一度キョキキョと笑つて違つた。

「……ハラムや御飯をちょうだい……」

「……ハ……ハイ……」

ハラムは面喰らつたらしかった。妾のために一所懸命で、ラドウーラ様にお祈りしていた最中だったらしく、毒氣を抜かれたように目ばかりパチクリさせていた。

「それからね。御飯が済んだら、妾に運命を支配する術を教えて頂戴ね。自分の運命でも他人の運命でも、自分の思い通りに支配する術を教えて頂戴……あたし……悪魔の弟子になつていいから……ネ……」

「……ハ……ハ……ハイ……ハイ……」

ハラムはイヨイヨ泡を喰つたらしかった。ムニャムニャと唇を動かしていたが、やがて、こんな謎のような言葉を、切れぎれに吐き出した。

「……運命の神様……ラドウーラ様の前には……善も……悪も……御座いません」

「ダカラサ。何でも構わないから教えて頂戴って言つてるじゃないの……あたしの運命を、お前の力で、死ぬほど恐ろしいところに導いてくれてもいいわ」

ここまで言つて来ると妾は思わず羽根蒲団を蹴飛ばしてしまつた。妾のステキな思いつきに感心してしまつて、吾れ知らず身体を前に乗り出した。両手を打ち合せて喜んだ。

「いいかい、ハラム。妾はまだハラハラするような怖い目に会つた事が一度もないんだから、お前の力でゼヒトモそんな運命にブツカルようにラドウーラ様に願つて頂戴……妾は自分で気が違うほど怖い目だの、アブナッカシイ目だのに会つてみたくて会つてみたくて仕様がいないんだから」

「……ハイ……ハハッ……」

ハラムはやつと息詰まるような返事をした。

「その代りに御褒美には何でも上げるわ。妾はナンニモ持たないけど……妾のこの身体でよかつたらソックリお前に上げるから、ハツ裂きにでも何でもしてチョウダイ」

ハラムはイヨイヨ肝を潰したらしかった。眼の玉を血の

ニジムほど剥き出した。唇をわななかしして何か言おうとした。……と思うと、その次の瞬間には、みるみる血の色を復活させて、身体じゅうを真赤な海老茶色にしてしまった。口をアングリと開いて、白い歯をギラギラ光らせながら、思い切つて卑しい……獣のような、声のない笑い顔をした。その顔を見ているうちに妾はヤツトわかった。ハラムの本心がドン底までわかつてしまった。ハラムは運命の神様のラドウーラ様から、この妾を生涯の妻とするように命令されているに違ひなかった。

ハラムはズツト前から、妾に死ぬほど惚れ込んでいたに違ひない。そうしてその悪魔みたいな頭のよさと、牡牛のような辛抱強さで、妾の気性を隅から隅まで研究しながら、妾の心を捉える機会を、毎日毎日、一心にねらい澄ましていたにちがいない。

「オホホホホ。おかしなハラム……そんなに真赤にならなくなつていいよ。妾は嘘を吐かないから……その代りお前も嘘を吐いちゃいけないよ」

ハラムは幾度も幾度も唾液を呑みこみ呑みこみした。御馳走を見せつけられた犬みたいに眼を光らせながら……。

「キット……キットお眼にかけます。ハイ、ハイ。私はお姫様の奴隷で御座います。ハイ……私は……私はまだ誰にも申しませぬが、世にも恐い……世にも奇妙なオモチャを二つ持つております、印度のインターナショナルの言葉で『ココナツの実』と申しますオモチャを二つ持つてお

ります。それは輸入禁止になっております品物でナカナカ手に入らない珍しいもので御座いますが、私は、その取次ぎを致しておりますので……」

「そのオモチャは何に使うの……言つて御覧……」

ハラムは急に両手をさし上げた。いかにも勿体をつけるように頭を烈しく振り立てた。

「イヤ……イヤイヤイヤ。それは、わざと申し上げますまい。お許し下さいませ。ただ今はそれを申し上げない方が、運命の神様の御心に叶うからで御座います。……しかし……それはもう間もなく、おわかりになる事で御座います。

私はその『ココナツの実』を、きょう中に二つとも、ある人の手に渡すので御座います。その方は、お姫様がよく御存じの方で御座いますが……そうしますと、その『ココナツの実』が、その方と、それからやはり、お姫様がよく御存じのモウ一人の方の運命を支配致しまして、お二方ともお姫様のところへは二度とお出でになる事が出来ないような、恐ろしい運命に陥れる事になるので御座います。お姫様の眼の前で……お身体の前で、そのような恐ろしい事が起るので御座います。そうして……そうして……お姫様は……お姫様は……」

「オホホホホ。キットお前一人のものになると言うのでしよう」

ハラムは真赤な上にも真赤になった。眼に涙を一パイに溜めた。口をポカンと開いて、今にも涎の垂れそうな顔を